

第4回これからの北海道立近代美術館検討会議 議事録

日時 令和4年(2022年)7月20日(水) 13時30分~14時40分

場所 北海道立近代美術館3階会議室(ZOOM併用)

出席者 別添「出席者名簿」のとおり

- 議題 1 近代美術館のミッション等に関する意見聴取の状況
2 今後の進め方

議事

(1) 議題1 近代美術館のミッション等に関する意見聴取の状況

ア 事務局から資料1及び資料2に基づき説明

(特記事項)

○資料作成の要旨

- ・第3回の会議では、ビジョンやミッションの言葉の使い方について、様々な場面で使われ方が異なっていたことを踏まえ、今回改めて、ミッション案とコンセプト案の言葉の定義を明確にした。
- ・ステークホルダーからいただいた意見について、すべて貴重な意見ではあるが、主な意見を例として記載しており、それらの意見を踏まえて、今後の検討の方向性といった形で示した。

イ 質疑応答等 (有・無)

(山上座長)

ステークホルダーの方々から、作品の収集保存、調査・研究、展示・企画、教育普及、連携、拠点、機能、人材育成、雰囲気作りなどの幅広い視点で様々な御意見をいただいた。全てを網羅することは難しい。何を見据えて、何に重点を置くのかを考え、バランスをとっていくことが重要。

(佐々木亨委員)

ステークホルダーの様々な方から意見を聞いたということは、時間もかかるし、大変な作業だったと思うので、このような作業を行ったということに対して大変お疲れ様でしたと申し上げたい。

9月以降も来館者に対して意見聴取を行うということで確認だが、今回のステークホルダーへのインタビューや、ペーパーでの意見聴取の時、特に対面で行っている時はどのようなやり方で実施したのか。参考資料を見れば、聴取項目や、グループインタビュー時の話している順番などはなんとなくわかるが、インタビューの方針はどのように立てたのか。

(事務局)

例えば、対象の方が高校生や大学生の場合は、近代美術館について、「今、あなたはどれくらい親しみを持っていますか」など、答えやすいような質問から意見を聞くようにしており、フォーカスグループインタビューの中では、近代美術館のこれまでの活動の評価、今後に対する期待・役割を2本柱として意見を聞くなど、対象に合わせていろいろな聞き方をした。

(佐々木亨委員)

今回、資料2で出てきた主な意見は、「こういう展覧会があればいい」や、「こういうイベントがあればいい」というような、直接的な要望が多いが、その背景にある「近代美術館に対してどういう価値を求めているのか」や、「本当はこういうものが欲しいが、そこが欠乏している」というような、もう少し要望の奥にあるものを聞き出したほうが、より有効な検討材料になるのではないかと。例えば、資料2の6ページのその他の意見で、「もう少し『おしゃれ』『素敵』『ときめき』が欲しい」という意見があるが、グループインタビューをやっていると「この意見をどのように実現するのか」などのように派生的に意見が出てきて、互いに意見しあうようになる。集団で実施している意味も考えると、このような発言を上手く取り込んでいくと、有効な

インタビューとなり、情報を得ることができる。これから来館者に対してもインタビューを行うということであれば、参考にしてもらいたい。

(北村委員)

資料2の1ページで主語を明確にするとあり、主な意見として、「社会にとって不可欠な『文化施設』」とあるが、美術館は、道民にとっての必要なインフラであって、展示や教育普及、保存のいずれも、すべて道民のためにあるという視点や見方を基本に置くべき。例えば、展示も「これを御覧ください」や「見せてあげます」ではなく、道民と一緒に体験を共有する、アートとの出会いを通じて、「一緒に見てみましょう」といった、美術館と観客と一緒にアートを体験するような施設が望ましい。

保存に関しても、資料2の2ページで「見せる収納」とあるが、収蔵品というのは道の資産であり、大事に扱わなければならないが、年中展示することはできない。そのため、収蔵すること自体が一つの展示であるような、建物や収蔵している場所も作品となり、すべて道民にとっての財産で身近なものであるという視点が必要。教育普及も同様で、美術館利用者が一緒に学ぶ場であるという視点が必要。美術館は道民にとっての基本的な社会的なインフラであって、常に道民のためにあるということが根本的に必要。

(菊地委員)

短期間の間に、これだけの量のインタビューをしていただき感謝。とても参考になる。

気づいたことは、資料2で、主な意見が抽出されているが、参考資料には、これ以上に様々な意見や要望が書かれている。主な意見として抽出すると、その意見だけに引っ張られて議論が進んでしまうのではないかと、いうところが少し心配。出されたいろいろな意見をマトリックスにして、どういう切り口でどういう意見があったかということを知りやすくまとめ、出た意見の全体像がわかったほうがいい。全体の中から一部だけ取り出すというより、「全体からこういう切り口で要望があった」や「こういう切り口で課題認識が収集できた」などの分析までであると、より説得力を持った意見聴取になる。

また、別の切り口で資料2の2ページの①ハーモニーのところ、環境、自然との調和が言われているが、50年先など長期間で考えたときに、カーボンニュートラルや生物多様性など、地球環境のメガトレンドにあった方針は入れなければならない。例えば、建築についても、世界で今主流になりつつあるような、環境配慮技術もしっかり取り入れていくということは、まさに自然と美術館とのハーモニーだと思うので、その点も①ハーモニーには入れて欲しい。

(事務局)

主な意見だけを抽出すべきではないということについて、その通りだと思っている。今回、インタビューの量が膨大であったため、時間的に間に合わなかったが、分析も進めている。一つ一ついただいた意見をすべて貴重な意見だと考えており、職員全体で共有しながら、ミッション検討を進めていきたい。

(佐藤委員)

ステークホルダーからの意見は生の意見も多く、大変参考になった。その中でまず注目したいのは、資料2の6ページの3のなかにある「もう少し『おしゃれ』『素敵』『ときめき』が欲しい」という意見。これは見過ごせない本当に率直な意見だと思う。こういった感性的な体験が欲しいということ。こうした意見を踏まえてどうすべきなのかということもミッション案の中に入れてもいい。具体的に言えば、ユニークな建築や空間、心地よい環境といったものも見据えるべき。その中にはハーモニーにもあるように自然との調和や、景観、エントランスの充実、駐車場も絡んでくる。施設的に伸び伸びとした展示空間、十分な教育的な施設や収蔵機能、修復機能を持ったものを作るなどの要素に加え、ミュージアムショップやカフェレストランなどの充実。これは、意見にあった『おしゃれ』『素敵』『ときめき』ということにも繋がっていく。

もう一つは、資料2の6ページの3で、「北海道を代表する中核美術館として、地域振興、観光振興など幅広い役割に込められるような施設を目指して欲しい」とあるが、これは文化芸術基本法や昨年末の文化審議会の答申にあるように、博物館に期待される今後の役割や機能にも連動してくる。Hubとしての美術館という言葉もあったが、HubはICOMの京都大会においても提唱されてきたことで、前回の会議でも意見として出ていたものだ。これはつまり、つなぐ・連携するということ。地域振興・観光、教育だけではなくて、さらに医療や福祉、産業、企業、それから食の問題など、様々な関係者と連携していくことと、さらにその関係を美術や文化との関連のなかで具体的にしていくことをミッションに加えるべきではないか。また、①から⑥のハーモニ

ーやヒストリー、キッズとあるが、この中のHOTのHをHubのHにすることなども考えた方がいい。もし、HOTを使いたいのであれば、HOT-Hubとするなど、再考してもよいのではないか。

三つ目として、ステークホルダーの意見の中に、「近代」という言葉がかなりの頻度で出ている。これまでの会議でも話をしたが、結論から言うと「近代」を外す方向で、何か大きな流れができないかと考えている。開館当初、道立近代美術館の館長で準備室室長だった倉田公裕さんが、明治以前と以後を区分し、明治以降の美術を扱うということを強調するために「近代」とつけたものだ、というようなことを言っていた。しかし、開館以降、数多くの前近代の展覧会を開催している。また、蠣崎波響といった近世の北海道美術やアイヌ関係の展覧会も開催している。もちろんそれらの大規模な展覧会については道立近代美術館が最もふさわしかったことによる。しかし間接的かもしれないが、そういった幅広い展覧会活動や収集活動などに「近代」という枠組みが足枷になっているのではないか。日本で最初の近代美術館は1951年に誕生した神奈川県立近代美術館。その翌年に東京国立近代美術館ができ、その後北海道立近代美術館を含めて日本各地に近代美術館ができた。じつはこの近代美術館とはニューヨークの近代美術館のコンセプトを参考にしたもので、現代の美術を扱っていくという方針があった。特に、ニューヨーク近代美術館が提唱したモダニズムという美学があって、その流れの中にある美術をモダンアートととらえて扱っていくという背景があった。しかし近年ではモダニズム自体が揺らいでおり、その画一的な美意識自体が大きく相対化されている。こうした状況を考えると、今後の幅白い活動のために「近代」という名称が有効なのかどうか、もちろん一定の時間が必要になると思うが、一度検討した方がよいのではないかと思う。ヒストリーの部分に関連するが、「近代」という名称を継承するにしても、なぜ「近代」なのかを明確にしながら、様々な時代や地域の美の多様性、また北海道ならではの地方性を追求するという方向性をミッションにしっかり入れていく必要があると思う。

(佐々木幸委員)

ステークホルダーの意見を読みながら思ったことは、様々な立場の方が話をしてくれたということがわかった。また、その人たちが経験した美術館の認識が非常によく表れていると感じた。それは本当に多様であって、立場の違いや世代の違い、感覚の違いが随分ある。例えば、観光で考えた場合は修学旅行の誘致が考えられるという意見があったが、教育と観光の観点で「修学旅行」ということは古い感じがするが、一方、おしゃれなカフェやバーが欲しいという今風の話もあって、それぞれの方々がそれぞれ体験した美術館の見方あって、そのイメージの中で様々な御意見をいただいたということがわかった。それはそれでとても貴重なことで、多くの方がまだ知らない、体験したことがないような美術館のサービスが提供できないかとも思った。また、非常にリアルな話で、車でアクセスしたいから駐車場が欲しいなど、具体的な意見もある一方で、理念の意見もある。

先ほど「近代」という話題もあったが、美術館そのもののあり方や、コレクションに対する考え方などいろいろなレベルの話、理念のレベルから現実の使い勝手のレベルの話があるので、一定程度整理して、どこにフォーカスを置くのかというような考えが必要になってくるのではないか。

私はシンガポールの美術教育をこの25年間ずっと追いかけており、シンガポールは歴史が浅い国で、もともと文化がなかなか育たないと言われてきたが、90年代の終わりから、国策として、芸術文化産業を育てていくプロジェクトに取り組んでおり、巨大な美術館を建てたり、昔の建物を改修してギャラリーにしたり、シアターを作ったり、様々なプログラムに投資している。いわゆる知識経済というもので、コンテンツで経済が回るというような考え方で、今、お金をかけて整備している。金儲け（経済優先）というような感じもするが、一方でそういった考え方はあってもよいと思う。今展開されている都心に美術館、文化施設を置いて、なおかつそこを経済拠点にしていくという考え方に近いとも思った。私は金儲けや商売のことはわからないが、少なくともそういった視点をこれから持っていくことは大事になってくる。つまり、美術館だけではなく、それを取り巻く教育や人材育成、様々な産業などとの関連を踏まえて、長期的なプランと展望の中で、結果を出して、次を考えていくという考え方が必要になる。

また、シンガポールは多民族・多文化国家と言われていて、カルチュラルハーモニーという言葉がある。つまり、多文化があるので、それらがうまくハーモニーを保って、ある民族の文化だけが突出することもなく、民族融和を図るというコンセプトがある。これから考えていくのであれば、国際性も踏まえて、人間の多様性もハーモニーに加えていただきたい。

それから先ほど佐藤委員がおっしゃったHOTについて、HOTという単語を使う年齢層は高い。今の若者はCOOLと言う。HにこだわらなければCOOLでもよい。その方が涼しい北海道らしくてよい。様々な年齢の、それぞれの方の思いがここに反映されてくるので、それを上手く汲みつつ、次世代のこれから5年・10年と将来展

望を満たした形がよいのではないか。

(北村委員)

近代美術館という名称を考えることとアーカイブを作ることは連動している。アーカイブについて、どこまで掘り下げるのか、その範囲を限定しないと、際限なく広がっていく。それはとても大事な仕事。着手するには、当然アーキビスト、専門家が必要。少なくとも北海道の美術についてのアーカイブをすれば、おそらく、これまでは1920年や30年代以降の歴史しか語られていない。先ほど佐藤委員がおっしゃったように、明治以前の問題はあまり取り入れられてない。北海道美術史という立派な本があるが、そろそろそれを書き換えなくてはいけない。今までの1920年代や30年代から始まる北海道美術史を書き換える役割としてアーカイブがある。

また、HOTに関して、地元の作家なども年に1回ぐらい発表の場が欲しいと言っているので、そういうギャラリーを作り、化石化していない作品が常にあるような、生きている美術館であってほしい。

もう一つ、ステークホルダーの意見で、「SCARTSに行くとかくさんの学生が勉強している。ああいう光景がとてもうらやましい。どうしてあのようなになるのか」という意見があったが、あそこには図書館があって、情報があって、スペースがある。付帯施設として図書館は作れなくても、例えば、資料室の資料を開放し、学生でも大人でも、展覧会を見に行かなくても、そこを利用できるといった開放性が必要。Hubの視点からは、企業のギャラリーのような役割を果たすことも良い。公立施設で、企業と繋がることは難しいかもしれないが、企業と繋がっていくということもいい。

(菊地委員)

ぜひ入れていただきたい大事な視点として、資料2の2の④にあるキッズも大事なことだが、もう少し多くの世代が楽しめる美術館ということも大事なので、例えばハーモニーのところにも人の多様性と同時に、世代を超えた美術館になっていくというようなビヨンドジェネレーションの視点はあったほうがいい。

国内外のいろいろな素敵な美術館を、旅行等で体験すると、まちのイメージの中心になっているような美術館が多い。美術館という範囲にとどまらず、デザインも含め、次の近代美術館がまさに「札幌・北海道のまちづくりを担っていく」くらいの大きい志を持った美術館になってもらえるとすごくワクワクするし、とても格好いい。

(佐々木亨委員)

意見を取りまとめるにあたって、もしくはこれからフォーカスグループインタビューを続けるにあたって、アンケートする側にとってある程度の見立てをもってやったほうがいい。例えば、資料の2の1ページの1のところで、ミュージアムに知識や感動、学びという典型的なところにこれからも重きを置いていきたいのか、それとも、もっと来館者の方が見ることを主体的・創造的に作って楽しんでいく、つまり、それぞれの来館者が、自分で使用価値を作り出していくような来館者像を目指しているのかという観点。そこがすごく大きな分岐点となる。従来の、知識・感動・学びを目的とする来館者像でいいのか、それとも違う来館者像を目指すのかというところについて、仮説的な考えを持ってこれからのインタビューを続けるといい。

(佐々木宰委員)

名称変更も含めて、「近代」という言葉の使われ方に関しては再考の余地がある。「近代」という言葉がつくことで、逆に制限される部分があるということも考えたほうがいい。

それから、キッズについて、子どもたちのことを考えて、教育も含めて考えることはとても大切だが、先ほど話があったように、子どもにだけ焦点を当てるのではないような感覚が必要。年齢に関係なく、これまであまり焦点が当たってこなかった方たちも含めて考えることは、大変喜ばしいこと。

また、ステークホルダーの意見の中に、学芸員への言及が多くあって、逆に言うと、美術館にいる人は学芸員しかいないと皆さんが認識していると思う。美術館には様々なスタッフがいて、海外にはエドキュレーターがいて、教育に関する仕事を請負っている。様々な機能が美術館にいるスタッフに求められており、そこにいろいろな可能性があると思うので、学芸員の仕事が増えてしまうことを考えると大変だが、様々な仕事の内容に適切に応じられる人の配置ができればいい。

(佐藤委員)

地域と連携すること、つまり企業、産業・福祉・医療・観光など様々な業種、人々と連携することを取り入れるべき。繰り返しになるが、Hub となることを頭出しできるようなミッションの作り方が必要ではないかと思う。様々な連携が必要となるため、エドューケーターだけでなく、アーキビストやドキュメンタリスト、修復関係のコンサーバーターさらには、コミュニケーターなど、適切な人材配置に広げていく。その点は重視したほうがいいと思う。

(2) 議題2 今後の進め方

ア 事務局から資料3及び4に基づき説明

(特記事項) なし

イ 質疑応答等 (有・)

第4回これからの北海道立近代美術館検討会議 出席者名簿

○ 構成員

(敬称略、五十音順)

所 属	職	氏 名	備 考
株式会社 haku	代表取締役	菊地 辰徳	
北海道大学	名誉教授	北村 清彦	
北海道教育大学釧路校	教 授	佐々木 宰	
北海道大学大学院文学研究院	教 授	佐々木 亨	
前札幌芸術の森美術館	館 長	佐藤 友哉	

○ 事務局

所 属	職	氏 名	備 考
北海道教育庁	生涯学習推進局長 (兼) 道立近代美術館担当課長	山上 和弘	座長
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課	課 長	高見 里佳	
	課長補佐	遠藤 新理	
	係 長	福土兼太郎	
	主 任	三國 桃子	
	主 事	宮下 直之	
北海道立近代美術館	副 館 長	松田 俊也	
	学芸副館長	中村 聖司	
	総務企画部長	豊村 洋	
	学芸部長	五十嵐聡美	
	学芸統括官	土岐美由紀	
	総務企画課長	今村ちぐさ	